

バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

Eine Betrachtung über das Spiel der ›Sechs Choräle von verschiedener Art‹
von Johann Sebastian Bach

依 藤 里 子

はじめに

バッハは、バッハ音楽の神髄とも云うべきオルガン曲の中で、173曲にも及ぶ数多くのオルガン・コラールを作曲している。その中で、《6つのコラール》は、最晩年の作品であるが、《18のコラール集》(Achtzehn Choräle von verschiedener Art) や《教理問答書コラール》(Katechismus Choräle) のように、専門的な知識を必要とするオルガニストのためではなく、広く音楽を愛し、楽しむ愛好家や教育用といえる。このオルガン・コラールを取り上げて、概説し、演奏に関する基本的な問題を考察する。尚、パイプ・オルガンは、大阪カテドラル聖マリア大聖堂 (St. Mary's Cathedral of Osaka) のフェルシューレン社製 (L. Verschueren、オランダ) を使用する。

《6つのコラール》は、ライプツィヒ時代 (1723~1750) に、ポーランド国王兼ザクセン選帝侯付宮廷作曲家、楽長、及びライプツィヒ音楽監督であるヨハン・セバスティアン・バッハ (Johann Sebastian Bach 1685~1750) によって作曲された。《6つのコラール》は、ヨハン・ゲオルク・シューブラー (Johann Georg Schübler 1725~1753) によって出版されたので、《シューブラー・コラール》(Schübler-Choräle) とも呼ばれている。シューブラーは、ドイツのチューリンゲンの森近くのツエラで生まれた。バッハのもとで学び、オルガニストであり、楽譜印刷者(銅版師)でもあった。出版されたのは、1746年から1750年の間であろうと考えられる。発売元は、ライプツィヒの楽長バッハ、ベルリンとハレのバッハの息子たち、ツエラの出版者(シューブラー)である。これらのことは、《6つのコラール》の副題^註として記されている。さらに、「ふたつの手鍵盤とペダルを持つオルガンで演奏する各種のコラール編曲6曲 (Sechs Choräle von verschiedener Art auf einer Orgel mit zwei Clavieren und Pedal vorzuspielen)」¹⁾ とある。6曲中5曲までが人気のあるカンタータの編曲である。当時、教会カンタータの編曲は、斬新なことであった。しかも、原曲をあまり変えていない。リ

バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

トルネロを伴ったアリア風で、ダカーボ構造をとり、トリオ、又はクァルテットで書かれている。簡素な形式を採っていて、広く音楽愛好家にも演奏出来るように、ストップも指示している。親しみ易く、理解し易く、その上に豊かな旋律美溢れるオルガン・コラールである。

(註) 副題は、次のとおりである。

von verschiedener Art auf einer Orgel mit 2 Clavieren und Pedal vorzuspielen, verfertigt von Johann Sebastian Bach Königl. Poln. und Churf. Sächs. Hof-Compositeur, Capellm. und Direct. Chor. Mus. Lips. In Verlegung Joh. Georg Schüblers zu Zella am Thüringer Walde Sind zu haben in Leipzig bei Herrn Capellm. Bach, bei dessen Herrn Söhnen in Berlin und Halle, u. bei dem Verleger zu Zella.

Johann Sebastian Bach [Neue Ausgabe Samtlicher Werke] Serie IV: Orgelwerke Band 1 Bärenreiter Kassel・Basel・London 1983. による。

1 《目覚めよ！との声がわれらに呼ばれる》 (Wachet auf, ruft uns die Stimme^註) BWV645

この作品は、1731年11月25日に作曲された同名のカンタータBWV140の第4曲、テノールのアリアを、オルガン・コラールに編曲したものである。定旋律は、テノールにおかれていて、コラール《目覚めよ！との声がわれらに呼ばれる》によるトリオで書かれている。定旋律と対位声は、次のとおりである。

定旋律

対位声

バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

原曲は、ヴァイオリン、ヴィオラの絃楽器のみで対位声をユニゾンで奏し、テノールが定旋律を歌い、その下に通奏低音が奏される。

この原曲のカンタータは、三位一体節後第27日曜日用である。作詞は、フィリップ・ニコライ (Philipp Nicolai 1556~1608) で、キリスト再臨のコラール《目覚めよ！との声がわれらに呼ばれる》(Wachet auf, ruft uns die Stimme) の第2節、1599年に作詞された傑作である。聖書のマタイによる福音書25章1~13節の、何時でも再臨のキリストを迎えうように備えをして生活をして居ることが必要である、との十人の処女の譬話、花婿到来の場面である。カンタータの歌詞対訳は、次のとおりである。

Zion hört die Wächter sigen,	シオン物見らの歌声を聞けり、
das Herz tut ihr vor Freuden springen,	その心喜びに溢れ、
sie wachet, und steht eilend auf.	目覚めて急ぎ起き上りき。
Ihr Freund Kommt vom Himmel Prächtigt,	その友天よりきらめき来たり、
von Gnaden stark, von Wahrheit mächtig,	天の恵みによりて強められ、
	真実の力によりて強き者とせられ、
ihr Licht wird hell, ihr Stern geht auf.	光さらに輝きわたり、星昇りゆく。
Nun Komm', du Werte Kron',	今こそおわしませ、尊き冠、
Herr Jesu, Gottes Sohn.	主イエス、神の子よ。
Hosianna!	ホサナ!
Wir folgen all	われらはすべて
zum Freudensaal,	喜びの広間へと従い行き、
und halten mit das	聖なる晩さんを共に分かち
Abendmahl ⁵⁾	祝わん。

定旋律は、ドイツ福音主義教会讃美歌 (Evangelisches Kirchen-Gesangbuch 略して E. K. G.) の Nr. 121に基づいている。その旋律を示すと、次のとおりである。

E. K. G. Nr. 121



この旋律は、日本基督教団讃美歌の174番に「主イエス・キリスト 再臨」と題して、採り入れられている。又バッハは、和声付けもしているが、それは、次のとおりである。



装飾音について見ると、バッハは、このオルガン・コラールで、原曲には見られない装飾音を使っている。

7小節目の3拍目に短前打音を新たに使用している。

バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

8)
原曲. 7小節目 (Violino I II
e Viola)

9)
BWV645. 7小節目

8、9、12、18、20、21、51、54、56、66、69、73小節目においても、装飾音を付け加えている。

原曲. 8小節目 (Violino I II
e Viola)

BWV645. 8小節目

原曲. 9小節目 (Violino I II
e Viola)

BWV645. 9小節目

原曲. 12小節目 (Violino I II
e Viola)

BWV645. 12小節目

原曲. 18小節目 (Tenore)

BWV645. 18小節目

原曲. 20小節目 (Tenore)

BWV645. 20小節目

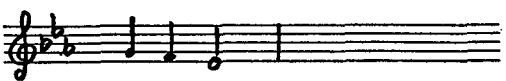
原曲. 21小節目 (Tenore)

BWV645. 21小節目

バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

原曲.51小節目(Tenore) 

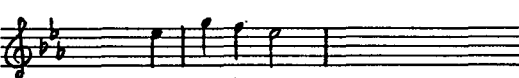
BWV645. 51小節目 

原曲.54小節目(Tenore) 

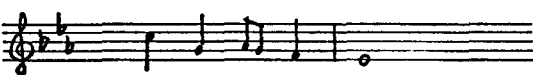
BWV645. 54小節目 

原曲.56小節目(Tenore) 

BWV645. 56小節目 

原曲.66小節目(Tenore) 

BWV645. 66小節目 

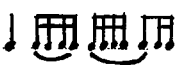


原曲.69小節目(Tenore) 

BWV645. 69小節目 



原曲.73小節目(Violino I II e Viola) 


BWV645. 73小節目 


アーティキュレーションについては、次のように奏することが望ましい。


5小節目では、原曲の Violino I II e Viola は、 オルガン曲は、
 と示されているが、オルガン曲同様とする。


BWV645. 5小節目 

53小節目では、原曲の Violino I II e Viola は、 オルガン曲は、

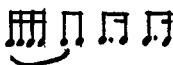

 と示されているが、原曲同様とする。


53小節目 

61小節目では、原曲の Violino I II e Viola は、 オルガン曲は、


 と示されているが、オルガン曲同様とする。

61小節目 

73小節目では、原曲の Violino I II e Viola は、 オルガン曲は、

 と示されているが、オルガン曲同様とする。

73小節目 

バッハは、この曲で、 のリズムにより、喜びを表現し、対位声のヴァイオリン I II ヴィオラの絃楽器のみによるオブリガートで、遠近を表わしている。婚礼に相応しい、易しい、生き生きとしたオルガン・コラールである。

レジストレーションは、次のように考える。

第1手鍵盤は、原曲では、テノールが定旋律を歌っているので、テノールの音域からもリード管が望ましく、その中でも、力強さ、豊かさ、輝かしさを持つトランペットが、適切である。従って、第2手鍵盤の対位声は、リード管を使用してはならない。大阪カテドラル聖マリア大聖堂のパイプ・オルガンで示すと、次のとおりである。

第1手鍵盤 (Hauptwerk 大阪カテドラル聖マリア大聖堂では、Great)

9 Trumpet 8'

第2手鍵盤 (Schwellwerk 大阪カテドラル聖マリア大聖堂では、Swell)

4 Rohrflöte 8'

5 Principal 4'

7 Schwegel 2'

8 Sifflöte 1 $\frac{1}{3}$ '

足鍵盤 (Pedal)

2 Subbass 16'

3 Octavebass 8'

5 Choral bass 4'

第1手鍵盤で奏する定旋律は、浮きたたせることが望ましいので、Gedackt 8' Octave 4'を加えても良い。第2手鍵盤は、8フィート、足鍵盤も16フィートのみで奏することも可能である。

註) . 6曲の曲名は、Johann Sebastian Bach 『Neue Ausgabe Sämtlicher Werke』 Serie IV: Orgelwerke Band I Bärenreiter Kassel・Basel・London 1983 による。

2 《われいずこへ逃れ行かん わが愛し奉る神の許へ》 (Wo soll ich fliehen hin, Auf meinen lieben Gott) BWV646

この作品は、失われたカンタータの編曲であろうと推測される。定旋律は、アルトにおかれ、コラール《われいずこへ逃れ行かん》によるトリオで書かれている。定旋律と対位声は、次のとおりである。

定旋律



対位声



定旋律は、ドイツ福音主義教会讃美歌 (Evangelisches Kirchen-Gesangbuch) の Nr. 289に基づいている。その旋律を示すと、次のとおりである。

E. K. G. Nr. 289



バッハは、《Auf meinen lieben Gott》に和声付けをしている。それは、次のとおりである。

バッハの《6つのコラル》 演奏のための一考察

アーティキュレーションについては、特に指示はないが、次のように奏することが、望ましい。

BWV646.¹⁴⁾ 1小節目

6小節目

7小節目

10小節目

11小節目

簡潔な曲で、シンコペーションのリズムにより、喜びを表現し、16分音符の動きで、罪から解き放たれる様子を表わしている。

レジストレーションは、次のように考える。

バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

第2手鍵盤で奏する対位声は、低音の声部を受け持つために16フィートを使用し、足鍵盤で奏する定旋律は、第1手鍵盤と第2手鍵盤で奏する対位声の中間の声部で浮きたたせることが望ましいので、4フィートを使用する。大阪カテドラル聖マリア大聖堂のパイプ・オルガンで示すと、次のとおりである。

第1手鍵盤 (Hauptwerk 大阪カテドラル聖マリア大聖堂では、Great)

3 Gedackt 8'

7 Rauschpfeife 2'

第2手鍵盤 (Schwellwerk 大阪カテドラル聖マリア大聖堂では、Swell)

1 Quintadena 16'

5 Blockflöte 4'

足鍵盤 (Pedal)

5 Choralbass 4'

第1手鍵盤では、Rauschpfeife 2'を除いて Spitzflöte 4' を使う事も出来る。第2手鍵盤及び足鍵盤は、8フィートを使用してはならない。

3 《唯 愛し奉る神に全てを委ね生きる者は》 (Wer nur den lieben Gott läßt walten) BWV647

この作品は、1724年7月9日に作曲された同名のカンタータ BWV93の第4曲、ソプラノとアルトの二重唱アリアを、オルガン・コラールに編曲したものである。定旋律は、テノールにおかれていて、コラール《唯 愛し奉る神に全てを委ね生きる者は》によるクェルテットで書かれている。定旋律と対位声は、次のとおりである。

定旋律



対位声



原曲では、定旋律を、ヴァイオリン、ヴィオラのユニゾンで奏し、対位声は、ソプラノとアルトが歌い、下に通奏低音が奏される。

Violino I II
Viola

Soprano

Alto

Continuo(Org. bez.)

piano sempre

17)

原曲のカンタータは、三位一体節後第5日曜日用カンタータである。ゲオルク・ノイマルク (Georg Neumark 1621~1681) の作詞で、コラール《唯 愛し奉る神に全てを委ね生きる者は》(Wer nur den lieben Gott läßt walten) の第4節、1657年の作品である。一般的な教訓(書簡第1 ペテロ3章8節~15節)や、一切をすててイエスに従った時のお話(ルカ伝5章1節~11節)が歌われていて、神への感謝と信頼があふれている。カンタータの歌詞対訳を示すと、次のとおりである。

Er Kennt die rechten Freudenstunden,	神は真の喜びの時を知りたまひ、
er weiß wohl, wann es nützlich sei,	彼の時の役立つ時を心得たまう、
wenn er uns nur hat treu erfunden,	もし神がわれらの内に真実を見出したまひ、
und merket keine Heuchelei,	われらの内に何の偽りも認めたまわずは、
so kommt Gott, ehe wir's uns versehen,	われらが過ちを犯す前に神はおわします、
und lässet uns viel Gut's geschehen. ¹⁸⁾	そして神はわれらに多くの善きものを与えた まう。

定旋律は、ドイツ福音主義教会讃美歌 (Evangelisches Kirchen-Gesangbuch) の Nr. 298 に基づいている。旋律を示すと、次のとおりである。

E. K. G. Nr. 298

この旋律は、日本基督教団讃美歌の304番に「信頼」と題して、採り入れられている。又、バッハは、和声付けもしている。それは、次のとおりである。



バッハが、原曲にも、オルガン・コラールにも書き入れていないが、演奏上付け加えた方が望ましい装飾音は、次のとおりである。

21)
BWV647. 14小節目



16小節目

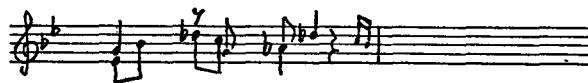


44小節目



39小節目の3拍目に、原曲では装飾音が記されているが、オルガン曲同様装飾をしない。

39小節目

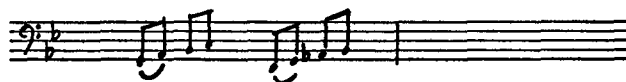


アーティキュレーションは、原曲に沿って次のように奏することが望ましい。

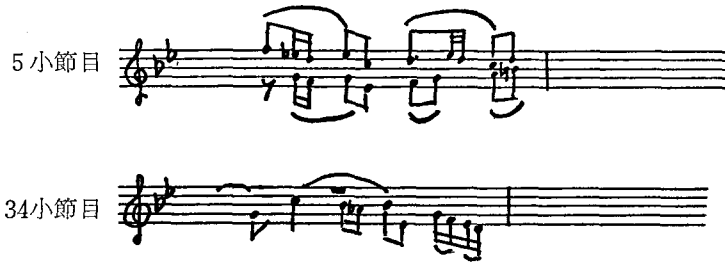
BWV647. 2、3、4小節目



4小節目



バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察



33、34小節目において、見事に喜びを表現している。

レジストレーションは、次のように考える。

対位声に広い音程の箇所（2、11、14、46小節目）があるため、2つの手鍵盤を使用せずに、第1手鍵盤のみで奏する。足鍵盤の定旋律は、手鍵盤の中間の声部にあることが望ましいので4フィートを使用する。大阪カテドラル聖マリア大聖堂のパイプ・オルガンで示すと、次のように考えられる。

第1手鍵盤 (Hauptwerk)

3 Gedackt	8'
5 Spitzflöte	4'
7 Rauschpfeife	2'

足鍵盤 (Pedal)

5 Choral bass	4'
---------------	----

第1手鍵盤は、Gedackt 8' のみでも可能である。足鍵盤は、4フィートだけで奏し、8フィートを使用してはならない。

4 《わが魂は主をほめたたえ》 (Meine Seele erhebt den Herren) BWV648

この作品は、1724年7月2日に作曲された同名のカンタータBWV10の第5曲、アルトとテノールの二重唱をオルガン・コラールに編曲したものである。定旋律は、ソプラノにおかれていて、コラール《わが魂は主をほめたたえ》によるクァルテットで書かれている。定旋律は、マルティン・ルターのドイツ語訳であるグレゴリオ聖歌《マニフィカト (Magnificat)》が基になっている。定旋律と対位声を示すと、次のとおりである。

定旋律



対位声



原曲は、2本のオーボエと1本のトランペットで定旋律を奏し（オーボエか、トランペットのどちらか一方の方が望ましい。）それに対して、アルトとテノールの二重唱、下に対位声として通奏低音が奏される。

Oboe I II
Tromba

Alto

Tenore

Continuo

原曲は、マリアの訪問記念日用カンタータである。作詞は、不明であるが、マルティン・ルター (Martin Luther 1483~1546) のマニフィカトによっている。聖書のルカによる福音書1章39節より見ると、神の霊によりイエスを宿し受胎告知(1章26節~38節)を受けたマリアが、その異常な出来事を親戚のエリザベツに話そうとして訪問した。(老年のエリザベツも石女であったが神の恩恵により奇蹟的に妊娠6ヶ月の身であった。)マリアの報告を聞くとエリザベツの胎児が、胎内で喜びおどった(44節)ので、エリザベツは、神がマリアにお告げになったことの成就を祝福する。そこでマリアは有名な美しいマニフィカト(讃歌)を述べ(46節~55節)、出産の日近くなって家に帰ったとある。ルカによる福音書の1章54節がそのまま歌詞になっている。さらにルカによる福音書1章55節を見ると、先祖アブラハムとその子孫を永遠にあわれむと約束(55節)なされた。神は、その約束をお忘れにならず子孫であるイスラエル民族を今に至るまで助けて下さったと記されている。歌詞対訳は、次のとおりである。

„Er denkt Er denkt der Barmherzigkeit, 主は哀れみをもちておほしめし、
und hilft seinem Diener, Israel auf.“²⁵⁾ 僕イスラエルを救い出したまう。

(ルカ. 1.54)

定旋律は、グレゴリオ聖歌《マニフィカト Magnificat》に基づいている。それは、次のとおりである。

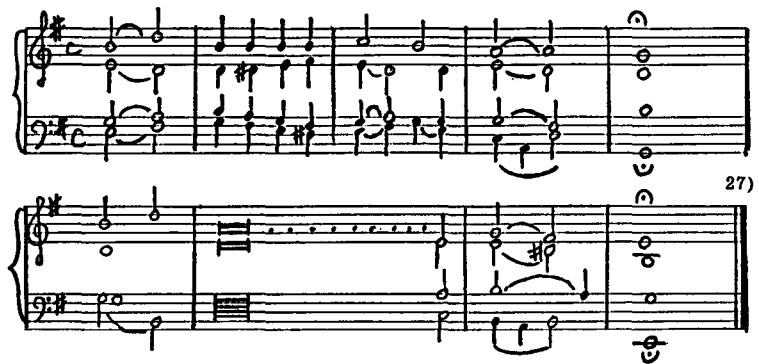
バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

26)



Mei -ne See-le er-he-bt den Herren, Und mein Geist freu-et sich
Got-tes mei - nes Hei-landes.

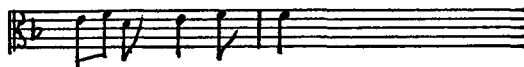
歌詞訳：わが魂は主をほめたたえ、わが霊はキリストをわが神として喜ぶ。
又バッハが、和声付けをしている。それは、次のとおりである。



27)

装飾音について見ると、原曲では見られない装飾音を、14、23小節で新たに付け加えている。

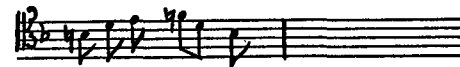
28)
原曲.14小節目(Alto)



29)
BWV648. 14小節目



原曲.23小節目(Tenore)



BWV648. 23小節目



アーティキュレーションについては、定旋律以外の声部は、対等に奏することが望ましいので、原曲には特に指示をしていないが、各声部共、次のように奏する。

バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

BWV648. 1~4小節目



5~9小節目



13、24小節目の広い音程の箇所は、右でとって弾くことが望ましい。その時、右は、2つの手鍵盤にわたって弾くことになる。バッハのオルガン曲では、あまり使われない状況である。又、アルトとテノールに半音階の動きがあるが、この作品の特色といってもよい。

レジストレーションは、次のように考える。

第1手鍵盤で奏するアルトとテノールの二重唱の対位声は、8フィートで奏し、足鍵盤は、低音の声部を受け持つので16フィートが望ましい。第2手鍵盤が受け持つ旋律は、フルート族（フルー管）に、色どりを添えるためにミクスチュアを加えるか、又はリード管のみを使用することも出来る。大阪カテドラル聖マリア大聖堂のパイプ・オルガンでは、次のように考えられる。

第1手鍵盤 (Hauptwerk)

3 Gedackt	8'
5 Spitzflöte	4'

第2手鍵盤 (Schwellwerk)

4 Rohrflöte	8'
6 Blockflöte	4'
7 Schwegel	2'
8 Sifflöte	1⅓'
9 Sesquialtera	2RK

足鍵盤 (Pedal)

2 Subbass	16'
3 Octavebass	8'

第2手鍵盤の定旋律は、浮きたたせ、第1手鍵盤と足鍵盤の対位声は、対等に奏することが望ましいことから、第2手鍵盤は、Rohrflöte 8' Blockflöte 4' とし、第1手鍵盤は、Gedackt 8'、足鍵盤は、Subbass 16' のみとしても、可能である。

5 《ああ、われらと共に留まりたまえ、わが主イエス・キリストよ》 (Ach bleib bei uns, Herr Jesu Christ.) BWV649

この作品は、1725年4月2日に作曲された《われらと共に留まりたまえ、時まさに夕べとなりしゆえ》(Bleib bei uns, denn es will Abend werden) BWV6の第3曲、ソプラノのアリアをオルガン・コラールに編曲したものである。定旋律は、ソプラノにおかれていて、コラール《われらと共に留まりたまえ、時まさに夕べとなりしゆえ》によるトリオで書かれている。定旋律と対位声は、次のとおりである。

定旋律

対位声

原曲は、ヴィオロンチェロ、ピッコロで対位声を奏し、ソプラノが定旋律を歌い、下に通奏低音が奏される。

原曲は、復活節月曜日(第2祝日)用カンタータである。作詞は、前半は、フィリップ・メラノヒトン (Philipp Melanchthon 1497~1560) で、後半は、ニコラウス・ゼルネッカー (Niko-

laus Selnecker 1530～1592) によっている。前半は、ラテン語歌 (1551年作) によるドイツ語コラール《ああ、われらと共に留まりたまえ、わが主イエス・キリストよ》(Ach bleib bei uns, Herr Jesu Christ) の第1節、1579年の作であり、後半は、同コラール第2節、1572年の作である。聖書使徒行伝10章34節～43節にペテロが異邦人にした伝道講演のことが記され、神はユダヤ人だけでなく、君たちギリシヤ人もローマ人も差別されないといい、イエスの伝道生涯、十字架の受難と復活の事実を述べ、自分は、神に立てられた者であり、審判主イエスの証人として伝道していることを述べている。又、ルカによる福音書24章13節～35節では、都エルサレムから三里ばかりのエマオという村に行く二人の弟子に、甦えられたイエスが現われて、色々とお話になるという写実的な描写で、二人がエルサレムに帰ってその報告をしたところ、エルサレムでも弟子シモンに現われ給うたとの事であった、とあるように、イエスの復活の記事が記されている。ヴィオロンチェロの音の跳躍は、不安を表わしているが、それもやがて静かな動きになり、慰めとなる。歌詞対訳は、次のとおりである。

Ach bleib bei uns, Herr Jesu Christ,	ああ われらの主イエス・キリストよ、
weil es nun Abend worden ist;	われらと共に留まりたまえ、
dein göttlich Wort, das helle Licht,	今まさに夕べとなりしゆえ、
laß ja bei uns auslöschen nicht.	聖なる御言と明かき御光を、
In dieser letzten betrübten Zeit	われらから消し去りたまうな。
verleih' uns, Herr, Beständigkeit,	最後の悲しみに満ち満ちたる時、
daß wir dein Wort und Sakrament	主よ、われらにたまわん耐え忍ぶる心を、
rein behalten bis an unser End'. ³³⁾	しかして御言と奇しき御業を
	われらの人生の終りまで濁りなく持ち続ける
	力を授け給え。

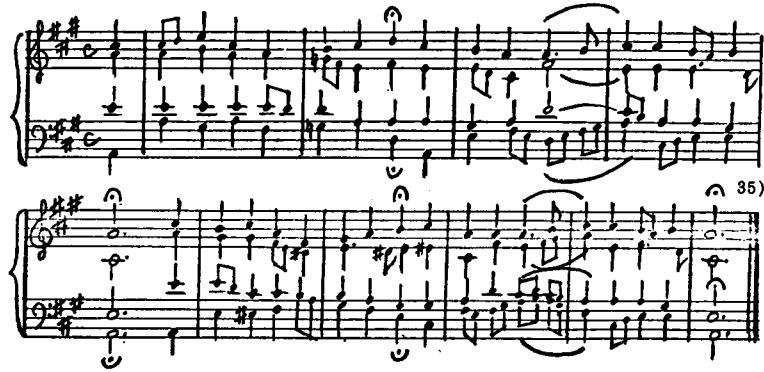
定旋律は、ドイツ福音主義教会讃美歌 (Evangelisches Kirchen-Gesangbuch) の Nr. 207 に基づいている。旋律を示すと、次のとおりである。

E. K. G. Nr. 207



この旋律をバッハは、和声付けをしているが、それは、次のとおりである。

バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察



装飾音については、原曲32小節目の1拍目を tr. で装飾しているが、オルガン曲同様に装飾をしない。



アーティキュレーションは、次のように奏することが望ましい。

1、2小節目では、原曲の Violoncello piccolo は、 オルガン曲は、 と示されているが、次のように奏する。



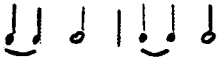

6小節目では、原曲の Violoncello piccolo は、 オルガン曲は、 と示されているが、次のように奏する。



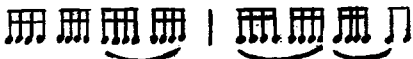

14小節目では、原曲、オルガン曲共、特に指示はないが、次のように奏する。




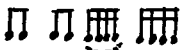
バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

24、25小節目では、原曲の Soprano は、 オルガン曲は、 と示されているが、原曲同様とする。

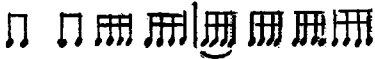

24、25小節目 

又、同小節で、原曲の Violoncello piccolo は、
オルガン曲は、 と示されているが、次のように奏する。

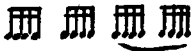

24、25小節目 

27小節目では、原曲の Violoncello piccolo は、 オルガン曲は、 と示されているが、次のように奏する。


27小節目 


34、35小節目では、原曲の Violoncello piccolo は、
オルガン曲は、 と示されているが、次のように奏する。

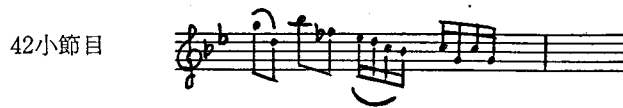
34、35小節目 

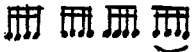
38小節目では、原曲の Violoncello piccolo は、 オルガン曲は、 と示されているが、次のように奏する。

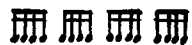
38小節目 

42小節目では、原曲の Violoncello piccolo は、 オルガン曲は、

 と示されているが、次のように奏する。



45小節目では、原曲の Violoncello piccolo は、 オルガン曲は、

 と示されているが、次のように奏する。



レジストレーションは、次のように考える。

足鍵盤は、低音の声部を受け持つので、16フィートが望ましく、柔らかいフルート族（フルー管）を使用し、第1手鍵盤の対位声は、8フィート、第2手鍵盤は、定旋律を奏するので、フルート族（フルー管）にミクスチュアを加え、浮きたたせることが望ましい。

第1手鍵盤 (Hauptwerk)

3 Gedackt	8'
5 Spitzflöte	4'
7 Rauschpfeife	2'

第2手鍵盤 (Schwellwerk)

4 Rohrflöte	8'
6 Blockflöte	4'
7 Schwegel	2'
8 Siffflöte	1½'
9 Sesquialtera	2RK

足鍵盤 (Pedal)

2 Subbass	16'
3 Octavebass	8'

第2手鍵盤は、Sesquialtera 2RK を除いて奏しても可能である。又、8フィートのみ重ねて奏することも出来る。第1手鍵盤は、Rauschpfeife 2' を除いて、Gedackt 8' Spitzflöte 4' としても良い。

6 《主イエスよ、いま天よりおわしますん》 (Kommst du nun, Jesu, vom Himmel herunter auf Erden) BWV650

この作品は、1725年8月19日に作曲された《力強き栄光の王なる主をほめたたえよ》(Lobe den Herren, den mächtigen König der Ehren) BWV137の第2曲、アルトのアリアをオルガン・コラールに編曲したものである。定旋律は、アルトにおかれていて、コラール《力強き栄光の王なる主をほめたたえよ》によるトリオで書かれている。定旋律と対位声を示すと次のとおりである。

定旋律

対位声

原曲では、ヴァイオリンソロによるオブリガート、定旋律を歌うアルトのアリアと、その下に通奏低音が奏される。

原曲は、三位一体節後第12日曜日用カンタータである。作詞は、ヨアヒム・ネアンダー (Joachim Neander 1650~1680) で、コラール《力強き栄光の王なる主をほめたたえよ》(Lobe

den Herren den mächtigen König der Ehren) の第2節、1680年の作である。聖書の第2コリント3章4節～11節に、パウロが福音を述べ伝える使徒としての使命は、神から直接授かった尊いものであり、新約の福音は、旧約の如く律法に仕えるものでなく靈に仕えるものである。石に彫りつけられた十戒の律法（モーセ）は、罪を宣告するものであるが、心の中に記された新約の靈の生命は、罪を赦して義とするものである。従って新約の生命は、消え去るべき律法とは比較にならぬほど、はるかに素晴しく永存する（11節）栄光に満ちたものであると述べられ、又、マルコによる福音書7章31節～37節では、イエスが異邦を廻ってガリラヤに来られての活動の一コマが記されている。耳が聞えず、口のきけない人を癒された。この愛の奇蹟は現代では、我々の靈の聾啞におきかえて考察することができ、このアルトのアリアの歌詞からも、信頼と喜びが窺える。歌詞対訳は、次のとおりである。

Lobe den Herren, der alles so	主をほめたたえよ、全てのものを
herrlich regieret,	御栄光の中に統べ治めたまい、
der dich auf Adellers Fittigen	鷲のつばさをもって確かな
sicher geführt,	道へ導かれ、
der dich erhält,	汝を支え続けたもう、
wie es dir selber gefällt;	そは汝のいかなることを望まんもかなえるなり。
hast du nicht dieses	汝こを感じとらざるや？
erspüret? ⁴¹⁾	

定旋律は、ドイツ福音主義教会讃美歌 (Evangelisches Kirchen-Gesangbuch) の Nr. 234 に基づいている。旋律は、次のとおりである。

E. K. G. Nr. 234



この旋律は、日本基督教団讃美歌の9番に「礼拝・讃美」と題して採り入れられている。又バッハが、和声付けもしている。それは、次のとおりである。

バッハの《6つのコラール》 演奏のための一考察



装飾音については、次のように奏することが望ましい。

4小節目では、原曲の⁴⁴⁾の Violino Solo は、装飾をしていないが、オルガン曲同様に、tr. で装飾して奏する。

⁴⁵⁾
BWV650. 4小節目



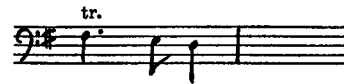
5小節目では、オルガン曲は、装飾をしていないが、原曲の Violino Solo 同様に、tr. で装飾して奏する。

5小節目



15小節目では、原曲の Alto には見られないが、オルガン曲で、新たに装飾音が、付け加えられている。オルガン曲同様とする。

15小節目



17小節目でも、オルガン曲には、装飾をしていないが、原曲の Violino Solo 同様に、装飾して奏する。

17小節目



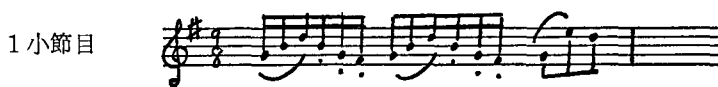
バッハの《6つのコラール》 演奏のための一考察

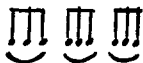
53小節目では、原曲の Alto には装飾音は、見られないが、オルガン曲において、付け加えられている。オルガン曲同様とする。



アーティキュレーションについては、原曲に沿って奏することが望ましい。

1小節目では、オルガン曲においては、特に指示されていないが、原曲の Violino Solo 同様とする。



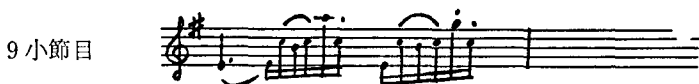
2小節目では、原曲の Continuo は、 オルガン曲は、特に指示されていないが、次のように奏する。



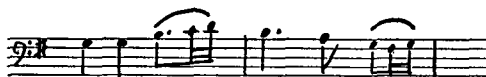
4小節目では、原曲の Continuo は、 オルガン曲は、 と示されているが、原曲同様とする。



6、7、9、12、13、14小節目においても、オルガン曲では、特に指示がないので、原曲同様とする。



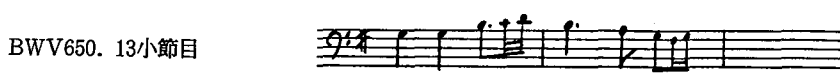
13、14小節目



音について見ると、2小節目で、原曲より変えている。



リズムについても、13小節目で変えている。



レジストレーションは、次のように考える。

第2手鍵盤は、低音の声部を受け持つために、16フィートが望ましい。足鍵盤は、2つの手鍵盤の中間の声部で、浮きたたせる必要上、4フィートを使用する。大阪カテドラル聖マリア大聖堂のパイプ・オルガンで示すと、次のように考えられる。

第1手鍵盤 (Hauptwerk)

- 3 Gedackt 8'
- 7 Rauschpfeife 2'

第2手鍵盤 (Schwellwerk)

- 1 Quintadena 16'
- 4 Rohrflöte 8'
- 6 Blockflöte 4'

足鍵盤 (Pedal)

- 5 Choralbass 4'

足鍵盤は、定旋律を受け持っているので、4フィートのみで奏し、8フィートを使用してはならない。第1手鍵盤は、Rauschpfeife 2'を除き、4フィートを使用しても可能である。

オルガン・ストップ (Register) 仕様⁴⁶⁾

大阪カテドラル聖マリア大聖堂 (St. Mary's Cathedral of Osaka) のパイプ・オルガンは、フェルシュエレン社製 (L. Verschueren, オランダ) で、1963年に設置された。61鍵で、第1手鍵盤 (Hauptwerk ここでは、Great) と、第2手鍵盤 (Schwellwerk ここでは、Swell) の

バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

手鍵盤2段と足鍵盤 (Pedal) で出来ている。足鍵盤は、放射状ペダルである。「ストップ・リスト」を示すと、次のとおりである。

第1手鍵盤 (Great) C-c⁴

1	Principal	8'
2	Dulciana	8'
3	Gedackt	8'
4	Octave	4'
5	Spitzflöte	4'
6	Nazard	2 $\frac{2}{3}$ '
7	Rauschpfeife	2'
8	Mixture	4RK
9	Trumpet	8'
10	Clarion	4'
11	Swell to Great	
12	Swell to Great	16'
13	Swell to Great	4'

第2手鍵盤 (Swell) C-c⁴

1	Quintadena	16'
2	Salicional	8'
3	Celeste	8'
4	Rohrflöte	8'
5	Principal	4'
6	Blockflöte	4'
7	Schwegel	2'
8	Sifflöte	1 $\frac{1}{3}$ '
9	Sesquialtera	2RK
10	Scharff	4RK
11	Krummhorn	8'
12	Schalmei	4'
13	Tremolo	

足鍵盤 (Pedal) C-g'

1	Contrabass	16'
2	Subbass	16'
3	Octavebass	8'

バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

4	Lieblich Gedackt	8'
5	Choralbass	4'
6	Mixture	3~4RK
7	Posaune	16'
8	Trumpet	8'
9	Great to Pedal	
10	Swell to Pedal	
11	Swell to Pedal	4'

Electropneumatic action 28 stops 1997 pipes

お わ り に

《6つのコラール》に接して、更に、バッハが身近に感じられ、バッハの偉大さと気品の高さに、認識を新たにした。今回は、演奏に関する基本的な問題を考察したが、今後、言葉を伴うカンタータから、アーティキュレーションの問題について、更に検討していきたい。又《6つのコラール》は、バッハの生存中に出版されたことは明らかであるが、自筆譜や、19世紀に至って、印刷譜の状況、現存のレコード、テープについても、研究を進めていきたい。尚、楽器のことであるが、パイプ・オルガンは、建物の諸条件も一体となって、大きく楽器と考えられることから、大阪カテドラル聖マリア大聖堂のパイプ・オルガンで論じてみた。このオルガンは、一般には、バロックからロマン派までの演奏が可能であると言われているが、バッハを論じたり、演奏する上では、メカニックの点からも必ずしも適切であるとは言えない。しかし建物が石造りであることから、音響、残響とも比較的良好で、一つの楽器として功を奏している。今後、さまざまな会堂とパイプ・オルガンで、奏していきたい。

引用文献

- 1) V. ルーカス著、辻 莊一、藤野 薫共訳『オルガンの名曲』株式会社パックスエンタープライズ 1983年初版 p. 113.
- 2) Johann Sebastian Bach 『Neue Ausgabe Sämtlicher Werke』 Serie IV: Orgelwerke Bärenreiter Kassel・Basel・London 1983 p. 86~p. 89.
- 3) 同上 p. 86.
- 4) J. S. Bach 『Cantata No. 140 Wachet auf, ruft uns die Stimme』 BWV140 Edition Eulenburg No. 1020 p. 39.
- 5) Bach 『Kantate NR. 140 Wachet auf, ruft uns die Stimme』 BWV140 Edition Breitkopf Nr. 7140 p. 34~p. 37.
- 6) 『Evangelisches Kirchen-Gesangbuch』 Ausgabe für die Evangelische Landeskirche in Baden p. 121.

バッハの《6つのコラール》演奏のための一考察

- 7) Johann Sebastian Bach's mehrstimmige 『Choralgesänge und geistliche Arien』 Ludwig Erk Leipzig C. F. Peters p. 103.
- 8) J. S. Bach 『Cantata No. 140 Wachet auf, ruft uns die Stimme』 BWV140 Edition Eulenburg No. 1020 p. 39~p. 42.
- 9) Johann Sebastian Bach 『Neue Ausgabe Sämtlicher Werke』 Serie IV: Orgelwerke Bärenreiter Kassel・Basel・London 1983 p. 86~p. 89.
- 10) 同上、p. 90~p. 91.
- 11) 同上 p. 90.
- 12) 『Evangelisches Kirchen-Gesangbuch』 Ausgabe für die Evangelische Landeskirche in Baden p. 289.
- 13) Johann Sebastian Bach's mehrstimmige 『Choralgesänge und geistliche Arien』 Ludwig Erk Leipzig, C. F. Peters p. 6.
- 14) Johann Sebastian Bach 『Neue Ausgabe Sämtlicher Werke』 Serie IV: Orgelwerke Bärenreiter Kassel・Basel・London 1983 p. 90~p. 91.
- 15) 同上 p. 92~p. 93.
- 16) 同上 p. 92.
- 17) Bach 『Kantate 93 Wer nur den lieben Gott lässt walten』 Edition Eulenburg No. 1067 p. 22.
- 18) Bach 『Kantate NR. 93 Wer nur den lieben Gott läßt. walten.』 BWV 93 Edition Breitkopf Nr. 7093 p. 20~p. 23.
- 19) 『Evangelisches Kirchen-Gesangbuch』 Ausgabe für die Evangelische Landeskirche in Baden p. 298.
- 20) Johann Sebastian Bach's mehrstimmige 『Choralgesänge und geistliche Arien』 Ludwig Erk Leipzig, C. F. Peters p. 108.
- 21) Johann Sebastian Bach 『Neue Ausgabe Sämtlicher Werke』 Serie IV: Orgelwerke Bärenreiter Kassel・Basel・London 1983 p. 92~p. 93.
- 22) 同上 p. 94.
- 23) 同上 p. 94.
- 24) Johann Sebastian Bach 『Cantatas Nos. 9-11』 Volume III K. 00807 Kalmus miniature score p. 57~p. 58.
- 25) Bach 『Kantate NR. 10 Meine Seel' erhebt den Herren』 BWV10 Edition Breitkopf Nr. 7010 p. 26~p. 28.
- 26) J. S. Bach 『Les Chorals pour Orgue De-J. S. Bach.』
- 27) Johann Sebastian Bach's mehrstimmige 『Choralgesänge und geistliche Arien』 Ludwig Erk Leipzig, C. F. Peters. p. 78.
- 28) Johann Sebastian Bach 『Cantatas Nos. 9-11』 Volume III K. 00807 Kalmus miniature score p. 57~p. 58.
- 29) Johann Sebastian Bach 『Neue Ausgabe Sämtlicher Werke』 Serie IV: Orgelwerke Bärenreiter Kassel・Basel・London 1983 p. 94.
- 30) 同上 p. 95~p. 97.
- 31) 同上 p. 95.
- 32) Bach 『Kantate 6 Bleib bei uns, denn es will Abend werden.』 Edition Eulenburg No. 1004 p. 19~p. 21.
- 33) Bach 『Kantate NR. 6 Bleib bei uns, denn es will Abend werden』 BWV6 Edition Breitkopf

- Nr. 7006 p. 18~p. 21.
- 34) 『Evangelisches Kirchen-Gesangbuch』 Ausgabe für die Evangelische Landeskirche in Baden p. 207.
 - 35) Johann Sebastian Bach's mehrstimmige 『Choralgesänge und geistliche Arien』 Ludwig Erk Leipzig, C.F. Peters p. 1.
 - 36) Bach 『Kantate 6 Bleib bei uns, denn es will, Abend werden』 Edition Eulenburg No. 1004 p. 19~p. 21.
 - 37) Johann Sebastian Bach 『Neue Ausgabe Sämtlicher Werke』 Serie IV: Orgelwerke Bärenreiter Kassel·Basel·London 1983 p. 95~p. 97.
 - 38) 同上 p. 98~p. 102.
 - 39) 同上 p. 98.
 - 40) Bach 『Kantate 137 Lobe den Herren, den mächtigen König der Ehren』 Edition Eulenburg No. 1059 p. 25~p. 29.
 - 41) Bach 『Kantate NR. 137 Lobe den Herren, den mächtigen König der Ehren』 BWV 137 Edition Breitkopf Nr. 7137 p. 13~p. 16.
 - 42) 『Evangelisches Kirchen-Gesangbuch』 Ausgabe für die Evangelische Landeskirche in Baden p. 234.
 - 43) Johann Sebastian Bach's mehrstimmige 『Choralgesänge und geistliche Arien』 Ludwig Erk Leipzig, C.F. Peters. p. 58.
 - 44) Bach 『Kantate 137 Lobe den Herren, den mächtigen König der Ehren』 Edition Eulenburg No. 1059 p. 25~p. 29.
 - 45) Johann Sebastian Bach 『Neue Ausgabe Sämtlicher Werke』 Serie IV: Orgelwerke Bärenreiter Kassel·Basel·London 1983 p. 98~p. 102.
 - 46) 吉田 實・秋元道雄・奥田耕天・志村拓生・馬淵久夫・望月広幸編『日本のオルガン』日本オルガニスト協会 1985年初版発行 p. 161.

参考文献

- 浅香 淳編集『標準音楽辞典』音楽之友社 1985年第1版第24刷発行
井上和男編集『クラシック音楽作品名辞典』三省堂 1985年第3刷発行
讚美歌委員会編『讚美歌略解』日本基督教団出版局 1983年第12版発行
新改訳聖書刊行会翻訳『聖書』日本聖書刊行会 1986年第2版発行
ヘルマン・ケラー著、中西和枝、フランス・ボーン、坂崎 紀共訳『バッハのオルガン作品』音楽之友社
1986年第1刷発行
シュヴァイツァー著、浅井真男、内垣啓一、杉山好訳『バッハ(上)』白水社 1983年発行
同上『バッハ(中)』白水社 1983年発行
同上『バッハ(下)』白水社 1983年発行